

たつて、短期間に、根底的な変改革、新しい制度・内容の創生など正に目を見張るものがある。

私の分担した教育制度や内容についても、明治五年（一八七二）にはじまった近代教育史の歩みのなかで、この戦後教育は、画期的なものであった。

焦土の中から立ち上った当市の学校復興や新教育制度・内容への移行・振興の問題は、単に経過的に推移を綴るのみでは、言い表せないものがある。関係者や一般市民の苦渋やひたすらの熱意努力が、基底にあったことを忘れてはならない。

戦後教育の特徴的な問題は、本市においても、多くの戦災校舎の復旧の問題であった。それに、昭和二十二年（一九四七）からの新学制の発足にともなう新制小学校・中学校・高等学校への移行問題、それに新制大学の発足などである。又幼稚園・保育所の増設整備もある。

教育制度の変革とともに教育内容の大改革であった。又教育行政面でも教育委員会制度の発足であり、それに学校教育の充実とともににより教育の社会化を図る意味で、社会教育・社会体育・社会スポーツ等の飛躍的拡充であった。

戦後の新しい教育制度に伴う、学校教育や社会教育の整備・充実が一段落した昭和五十年に入ると、学校教育でも画一的教育から能力主義、専門教育の充実が叫ばれ、最近市内の私立高校などの対応が注目される。

又生涯教育の充実・生涯学習の機会拡充が唱えられ、市当局や市民の動きも活発化している。

戦後約半世紀に及ぶ当市の教育史を、清水威先生と担当し、漸く

執筆を終えました。いままで、その変革と推移を一部経験的に理解していたと思っていましたが、実際、時を追って内容を見て、その変革のスケールの大きさ、内容の豊富さ、そしてその成果を、驚きをもって再確認したという思いです。

## 悔いのない終稿

専門委員 坂本 徳一

公費を使う行政側の史誌に、反体制側の記録を載せるのは、長い間タブーとされてきました。市民サイドに立って、十年の歳月をかけて編さんした『甲府市史』には、今まで記録できなかった事例を自由に書き込むことができました。

同史の近・現代の社会・世相を担当した私も「近代編」では、幸徳秋水の大逆事件に連座した宮下太吉、大正七年八月に起きた甲府の米騒動の顛末、昭和六年のＳＭ甲府同好会の手入れなど不況下の市民の間から起きた反政府運動の記録なども掲載することができたことを喜びとしています。

こうした画期的な『甲府市史』の編さんに初めから参加させていただき、伊東壯先生をはじめ各委員の先生方、市史編さん室の高木伸也室長をはじめとする市の職員の皆様のご指導とご協力を仰ぎ、暗中模索で出発した私の執筆分担を大過なく終稿することができました。思い出深い先生方に、この誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、『甲府市史』と併行して編さんした『赤十字山梨百年のあゆみ』『山梨県新聞販売史』などの史料蒐集の点でも

スムーズに運び、刊行することができました。

『甲府市史』の終刊を機に、史料漬けになっている身辺を整理して、またイチから出直したいと考えております。

## 文学の領域に携わって

専門委員 塩野雅貴

明治以降の文学活動を、詩・川柳・文芸評論等の展開を主として整理する機会を与えてもらいました。従来の市町村史（誌）の実態からすれば、文芸に関する項などは断片的な人物紹介程度が普通であって、甲府市史のように、市民の文化的活動の歴史の一つとして相当なページを割いた例はほとんどありません。この扱いについては、編さん委員会などかなりの論議があったことと推察致しますが、市民生活の姿をできるだけ多面的にとらえるという委員会の方針から、結果として『甲府市史』の特色の一つを生み出したものと思われまします。ただ、その場に加わる折角の機会を与えられたにもかかわらず、ご期待に添うまでには至らなかったことは容赦していただくよりほかありません。

ところで、甲府における文学活動の展開をたどりますと、そのまま山梨県全体と重なってしまします。もちろん、甲府の歴史的・地理的位置からすればあたりまえのことに過ぎませんが、そのあたりまえな展開の姿の中に、山梨の文化の質というか方向というか、そういう本質にかかわり、しかも現在なお抱えているいくつかのテーマの存在を思わずにはいられませんでした。

それらの中で特に重要なテーマは、圧倒的な中央の影響力を避け

得ないものとしながらも、なおかつ山梨の文学の独自性を求めることは可能かということであったようです。小説における農民文学系諸作家の努力や詩における風土詩の提唱などはその試みへの苦闘を偲ばせますが、残念ながら成熟するに至らず中央からの大波に吞まれてしまいました。そして、そういう結果には、彼らを支えるはずの市民の側の姿勢があったと思われるのです。

中央と地方を対立的にとらえてみると、政治・経済はもとより、地方が中央のメカニズムの中に組み込まれて独自性を失っていくというのが近代以降の日本社会の大勢であり、「地方の時代」などという口あたりのよい言葉の空しさは腹立たしいほどですが、政治や経済と違って、文化の領域ではなお独自性を求める余地があるように思われます。それは山梨の文化の総体は県民の心の現れであり、その県民は山梨という風土の中に息づいてきているからです。山梨の文化に対して不毛あるいは質の低さを指摘する声が時折ありますが、その当否の検討は別として、もしそういう感じを抱くとするなら、中央を意識しそこへのつながりを求めようとするあまりに、自己の立脚する風土への愛着が乏しいという傾向を理由の第一に挙げることになりましようか。模倣はどこまでも亜流の域を脱することができません。甲府の文学活動の歴史をたどってみると、短詩型文学を除いて、極少数の人の悪戦苦闘の姿のみがあって、それを支えるはずの多くの人影が見えないというのが実感でした。